
病室にて

滾

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

病室にて

【Nコード】

N8382B

【作者名】

滾

【あらすじ】

僕は夏休みで舞い上がっていた。友達との遊びの途中登った坂道。そこでの転倒。僕は視力を失っていた。

一話 夏休みにて

僕が視力を失ったのは今から五年も前の、夏休みが始まって間もない頃だった。

夏休み、という小学生には堪らない響きに後押しされて、僕は自転車に乗って友達と走り回っていた。

小学六年生。遊び盛りで、何でも挑戦してみたくなる年の頃である。中には引っ込み思案で、中々遊びとは無縁な子どもも中にはいたが、生憎僕はその部類からかけ離れた存在であった。

その日も、僕は友達と一緒に自転車で走り回っていた。

子どもの時分、それくらいしかやる事が無かったのも理由の一つであるが、その頃流行りのゲームというのは、僕にはどうにも合わないものであった。

田舎であるため、見渡せば必ず山が目に入った。

その山の幾つかは都市に進出され、堀り進められ、住宅街が出来ていたりもした。

子どもの僕等は、その住宅街の坂道に興味を持った。

山を切り崩して出来た道である。急な坂で、子どもが自転車に乗って登るには大変だったが、僕等の興味はその『先』にあった。

必死になって自転車を引き、道が尽きる先まで行った。

そしてそこから見下ろす景色に、僕等の胸は一つの想いに沸き躍るのだった。

この坂を自転車で駆け下りていったら、どれだけ楽しいだろう。

そんな想いである。

今から考えれば、とてもとても恐ろしくて出来やしない。が、やはりそこは子どもであったため、恐怖心よりも好奇心の方が勝ってしまった。

「行くぞ！」

と、友達が言った。

僕は大きく頷いて、自転車に跨った。

「それ！」

と、僕と友達は勢い良く駆け出した。

駆け出した、と言っても、下っているのである。

ぐんぐんと、スピードが上がっていく。

それでも、僕も友達も、ブレーキを掛けようとは思わなかった。

それでも少し、ほんの少し恐怖心が芽生え始め、ちよつとブレーキを掛けてみようか、とブレーキに手を伸ばした。

その瞬間だった。

石、だったか、それとも段差であつたか。それは覚えていない。

というより、物凄いスピードであつたため、目では捉え切れなかった。

ともかく、僕の漕いでいた自転車は、何かに躓いてしまったのだ。

「うわ！」

と、思わず声を上げた。

思わずブレーキを掛けたのはいいが、それが前輪のブレーキであつたため、自転車の後輪が持ち上がってしまった。

そのまま、僕は前のめりになって、自転車から放り投げられた。

地面に衝突する直前か、もしくは直後か、ともかく、その後の記憶は無い。

気が付くと僕は横になっていた。

下がコンクリートのような固い感触ではなかったから、ベッドの上だろう、とスグに解った。

体をもぞもぞと動かすと、全身に激痛が走った。

針で突き刺されるような痛みと、鈍痛とが同時に体を襲った。

「痛ッ！」

と思わず声を上げると、今度は、

「健ちゃん！」

という声が横から聞こえた。

健ちゃん、と言うのは、僕の愛称である。この呼び方をするのは、家族以外にはおらず、その声の主が母である事も、すぐに解った。ただ、僕はこの時ようやく気が付いた。

声は聞こえても、母の顔が見えないのである。

目は開けているつもりだったが、そこは真っ暗だった。

この時、僕は初めて、視力を失っているのだと気付いたのだった。

一話 夏休みにて（後書き）

一応ホラーの分類に別けましたが、ホラーではないかもしれません。もし「これは○○のジャンルだろ」というご意見がありましたら、お知らせください。

ともあれ、楽しんで頂ければ幸いです。

二話 夜にて

頭を打った事からの、一時的な視力の傷害だった。

一ヶ月もすれば治るだろう、とお医者さんに言われ、僕は目に包帯を巻かれた。

まあ、包帯を巻かれていようといまいと、視力が無い僕には関係のない話だ。

僕は体中にも怪我を負っているらしかった。

右腕は骨折して、固定されて動かない。あと、動こうとすると、胸の辺りに奔るような痛みを覚えた。

全身打撲に、腕の骨折。そして視力の傷害。

お世辞にも、日常生活に支障がない、とはいえない状態だった。

当然のように、僕は入院させられる事になった。

個室に案内——と言っても、車椅子に乗せられて連れて行かれただけであるが——されて、僕はそのベッドに横になった。

両親が代わる代わるお見舞いに来てくれたのだが、家は共働きだったため、来れない日も多かった。

友達も来てくれたが、そんなものは入院してから一週間程度の事で、その後ともなれば、皆各々の“夏休み”を堪能しているようだった。

入院してから二週間が経とうとしていた。

友人が尋ねてくることもめっきり少なくなり、部屋に尋ねてくるのは両親か、それとも看護師か医者か、と言った日々である。

一応部屋には備え付けのテレビがあり、それを一日中点けてはいたのだが、音だけで楽しめるほど大人ではなかった。

垂れ流しのテレビの音。

暗い視界。

朝か昼かもわからない。テレビから流れてくるニュースや番組から、時折時間を知る事が出来る程度だ。

しかし、一応それまでの習慣は体に染み付いているようで、朝になれば起き、夜になれば寝る事が出来た。

しかし、この二週間を過ぎた辺りから、僕の体にはある変化が現れ始めていた。

パキ・・・パキ・・・

音が聞こえる。

一昨日くらいからか、夜になると、この音が聞こえてくる。

どうやら部屋の中の何かが軋んでこんな音になるらしい。

正確に言くと、夜になると聞こえるわけではなく、夜のように静かで意識が散漫して——否、寧ろ集中しているのかもしれない——いと聞こえてくる。

この音が聞こえ始めたのが、さっきも言ったように一昨日のあたりからである。

その頃から、ようやく体がこの状態に慣れてきたのか、耳が良く聞こえるようになってきた。

別に、周りの音が大きく聞こえるようになったわけではなく、小さな音が拾えるようになって来たのである。

が、ハッキリ言ってそれは小学生であつた僕には必要なく、小さかつた僕には邪魔なもの以外のなにものでもない存在だった。

何故なら、寝ようと思うと音が聞こえてくるのである。

一度聞いてしまうと、不思議な事にその音がどんどん大きく聞こえてきてしまう。

目を開けようにも、僕の視界は寝ても冷めても真っ暗のままである。恐怖を拭い去ろうにも、僕にはどうする事もできなかった。

そこで、僕が考えたのはテレビを点けたままにする、というものだ。点いたままのテレビに布を被せて明かりを外に漏らさないようにし、音を出来る限り小さくして眠る事にしたのだ。

そうする事で僕は余計な音を聞く事なく、いつしか眠りにつけていたのだ。

が、

ある日の事である。

僕はいつものように、テレビを点けたまま横になっていた。いつもならば気付くと眠れているのだが、その日は中々寝付けずいた。

ベッドの上を何度も転がり、寝やすい体勢を取ろうと試みるも、中々眠れない。

そうしている内に、僕はある音を聞いた。

ハー・・・ハー・・・

最初はテレビの音か、と思ったが、テレビは全くそのような音を流している様子ではない。

では何か？と、僕は恐る恐る耳を傾けてみた。

スー・・・ハー・・・スー・・・ハー・・・

吸う 吐く 吸う 吐く

呼吸のように聞こえるそれは、どうやら人間のものである事が解った。

誰かがいるのか？と考えたが、最後に看護師が僕の体に毛布を掛けて出て行ったのを最後に、僕は誰かが部屋に入った音を聞いていない。

では誰が・・・？と考えたとき、僕の脳裏に嫌な考えが浮かんだ。お化けの存在である。

まだ小さい時分、お化けというのは注射よりも嫌っていた。

だから、一度頭の隅にそれが思い浮かんだだけで、もう頭の中はそれで一杯になってしまった。

二話 夜にて（後書き）

何とかホラーになりそうです。

三話 話にて

昼ごろ。だろうと思う。

視覚が働かないと、普段は解るそんな事すら解らない。

が、今の僕にとって今が昼であるのか、それともそうでないのかは、問題ではなかった。

ただ一つ。ただ、夕べの“事”だけが、頭の中で何度も何度も反芻されていく。

荒い息遣い。今でもハッキリと思い出せる。

「夢だ」と言われれば、そうかも知れないとは思う。が、それでも納得できない“現実感”があったのも事実だった。

夢なのか。そうではないのか。

それが頭の中でぐるぐると巡り、さっきから垂れ流しにしているテレビの音も、殆ど耳に入ってこなかった。

だから、

「やあ」

その声が聞こえた時、僕は身を固めた。

反射的に、声が聞こえた方に顔を向ける。

「な、何・・・？何でそんなにビックリしてるの・・・？」

と、声は言った。

その声には、聞き覚えがあった。

「お姉ちゃん・・・」

島野 明美さん。当時確か19歳で、大学生であったと思う。

よく近所の子どもたち——つまりは僕等であるが——と遊んでくれる人で、気さくで優しいお姉さんだった。

「ああ、何でもないよ。大丈夫」

僕は声のするほうに顔を向けた。

「ああ、よかったよ。元気そうで」と声が言った。

「ゴメンね」とも。

「本当はもっと早く来たかったんだけど、予定がね」

「ううん、いいよ」

声が移動している。

今、僕の隣にお姉さんが居た。

ふと、僕は思った。

昨日の話を、お姉さんに相談してみようか。と。

別にお姉さんがこういう話に詳しい、というわけではなかったが、誰かに話しておきたい気持ちがあった。

家族にそんな話をするとか心配されそうだから、まだ誰にもその話は話していなかった。

「あのさ・・・」

と、僕は口を開いた。

「ん？何？」と、お姉さんは言った。

「夕べね・・・」

僕は夕べの話を簡潔に話した。

“何”かが僕の部屋に居た事と、それが確実に“人”ではないという事を。

「・・・」

お姉さんが黙り込んだ。

僕は何も言わないまま、お姉さんの反応を待つ。

数分して、お姉さんが口を開いた。

「私の、大切な人の話なんだけどね・・・」と。

「私の大切な人は、この病院にずっと入院してたの。森川 修一って言うんだけど・・・」

お姉さんの声は、とても悲しそうに聞こえる。

「その彼はね、もう絶対に治らない、ってお医者さんに言われるくらいに重病にかかってて、手術もできない状態だったの」

僕は頷く。

「私、毎日この病院に通って、何とか治って欲しかったの……。

それでも、彼の容態はどんどん悪化して……」

それでね、と、お姉さんが口を開いたとき、

ガラガラガラ

と、扉の開く音がした。

僕は思わずそっちを向く。と、

「お昼ご飯ですよ」と、看護婦さんの声がした。

「あ、はい」僕は頷いた。

「じゃあ、私帰るね」

お姉さんが言った。

僕は黙って頷いた。あの話を、看護婦さんの前で出来ないことから

い、子どもの時分にもよく解っていた。

それに、と、僕は思った。

もう、皆まで言われなくても、確信できていた。

「あの、看護婦さん」

お姉さんが出て行ったのを確認して、僕は看護婦さんに話しかけた。

「何？」と答える看護婦さんに、僕は、

「森川 修一って人、ここに入院してたの？」

と聞いた。看護婦さんは驚いたような声で、

「そうよ、何で知っているの？」といった。

僕は首を横に振って、別に、とだけ言った。

間違いない。

昨夜この部屋に居たのは、その人だ。

と、子供心に、何故か納得していた。

三話 話にて（後書き）

遅くなってしまうました。

四話 金縛りにて

夕べ僕の部屋に來たのはお姉さんの大切な人——森川 修一さん——
—だと言つ事が解つた。

確証こそ無かつたが、僕は何故か子供心に“そう”だと思つていた。
けど、と、僕はベッドの上で横になりながら思つた。

お姉さんに大切な人が居た事を、僕は知らなかつた。多分、近所の
子ども達、つまりお姉さんによく遊んで貰っている子達の誰もが知
らないと思う。

何故なら、そんな話は聞いた事も無かつたし、その森川さん、とい
う人も見た事が無かつた。

ただ、確かに夏休みに入る少し前から、お姉さんの姿を見なかつた
な、とも思う。

きつと、森川さんのお見舞いに行つていたのだろう。

しかし、森川さんは死んでしまった。お姉さんは“亡くなった”と
までは言つていなかったが、きつとそう。

だけど、とも思う。

そんな人が、何故僕のところに現れたのだろうか？と。

さつきも言つたように、僕は森川さんという人の顔を見たことも無
かつたし、そもそもそんな話を聞いたことも無かつた。

つまり、向こうも僕の事を知らないという事だ。なのに、何で僕の
ところに？

僕はあの幽霊が森川さんだと疑つていなかった。

コンコン・・・

と、音がした。

扉がノックされたらしい。

僕は少しびっくりしながら、

「ハイ・・・」と小さな声で答えた。

すると扉が開く音と共に、看護婦さんの声が聞こえた。

「そろそろ消灯時間だから、テレビ切ってね」

「は、ハイ」

解りました。と、僕は頷いた。

じゃあ、電気消しますね。と、電気を消す音が聞こえた。

目の見えない僕にとって電気の有無はどうでもよかったが、ともかく僕は「おやすみなさい」と看護婦さんに挨拶をした。

眠れない。

電気を消してどれ位経ったか解らないが、とにかく僕は眠れなかった。

寝る前に散々あんな事を考えていたからだろう、眠気はあっても体がそれに従わない。

電気が点いていようが消えていようが変わらない暗闇の中で、ただ思い浮かぶのは昨夜の幽霊の事ばかり。

今日も来るのだろうか？

来るとしたら、また部屋の隅で存在をアピールするのだろうか？

そんな事を考えているうちに、

うつら、うつらと、

包帯の下で、

まぶたは閉じ――

そして緊迫感で眠気は消し飛んだ。

眠れるか眠れないかの狭間。もしかしたら少しは眠っていたかもしれない。

しかし今、僕は言い知れようの無い“何か”で眠りから覚めた。

何かに押さえつけられるような圧力。それが、体を四方八方から締め付ける。

“金縛り”という現象だった。

息が苦しくなり、体が一切動かせなくなった。

元々目は見えないから、周りを確認することも出来ない。

が、

僕はその時既に“感じ”とっていた。

その存在。

部屋の隅。

スー・・・ ハー・・・ スー・・・ ハー・・・

昨日と同じ、あの吐息。

昨日と同じ、あの気配。

間違いない。

僕は思った。

ヤツだ！と。

森川だ！と。

吐息は昨日よりも近くに感じる。

部屋の隅ではない。テレビの辺り。

昨日よりも近い。

その事実には、僕は恐怖心をより大きくさせた。

ただ、何故かその反面、冷静でもあった。

昨日で慣れたのかもしれない。もしくは、お姉さんに話を聞いていたからかもしれない。

僕は動けない体の変わりに、と、声が出るかを試してみた。

「あ・・・ああ・・・」

出る。小さく、ではあるが、確かに出た。

僕は、その小さな声で、気配に声を掛けることにした。

「森・・・川・・・さん・・・？」

と。

すると、

・・・・・・。

気配は一瞬黙った後、

フツ・・・

笑・・・った・・・？

そうして、気配は消えた。

本来なら、ここで僕の金縛りは消えたりするのだろうが、その時、僕の体への圧迫感が増した。

息すら困難なほどに、締め付けられるかのような感覚。

熱が出たときのような、茹だるような暑さの反面、凍えるように背筋には寒気が走る。

うなされるような体のたるさの中、

遠く、

声が聞こえる。

喧騒・・・？

先生——さんが——です！——が——をこっちに——

早く——

その声すらも現実なのか夢なのか。

解らないままに、

僕の意識は暗転——

五話 部屋にて

僕は看護婦さんの声で目を覚ました。

「朝食の時間ですよ」

その声に起こされた僕は、しばらくボーとしたまま、半身を起こしていた。

そして、

はっ

と思い出した。

昨日の事。

夕べの事を。

「はい、あーんして」

と、恐らく僕に箸を差し出しているであろう看護婦さんの方を向き直り、

「あの」と僕は言った。

夕べの事を看護婦さんに説明したのだ。

もうダメだった。

もう、あの幽霊が誰だ、とか、そんな話はどうでもよかった。

ただ、もうこの部屋から出ていきたかった。

全てを話すと、看護婦さんは、

「そう・・・」と言った。

「解ったわ」とも。

「だけど、部屋を変えるっていう話は、私が独断では決められないの。だから、先生に聞いておくわね」

と、看護婦さんは言ってくれた。

僕は安心して、差し出された朝食を食べ終えた。

看護婦さんが出て行った直後、

「あ、先生、ちょうど良かった」

という声が廊下で聞こえた。

僕は目が見えなくなつた所為で耳がよくなつた。だから、外に居る看護婦さんとお医者さんの会話も聞こえてきていた。

看護婦さんは声を細めて言った。

「高野君、何か怖い夢を見るらしいんですけど」

「そうか、じゃあ安眠剤でも出しておこうか」

こういつた会話が聞こえてきた。

どうやら、僕は信用されていないらしかった。

「やあ」

声が聞こえたのは、丁度お昼のニュースが流れている頃、丁度うとうととしていた時だった。

「あ、お姉ちゃん？」

どうやら声の主は明美お姉さんのようだ。

何をしていた？というお姉さんの問に、僕は寝てた。と答えた。

「ああ、じゃあ、寝ているのを邪魔しちゃったかな？」とお姉さんが言つたので、

ううん。と、僕は首を振つた。

そして、間も無く、話は夕べの話に切り替わつて言つた。

「部屋の隅に居た息の音が、すぐ近くにまで来たんだ」

「そう・・・」と、お姉さんは言つた。

「金縛りは苦しいからね。大丈夫だった？」とも。

僕は、「なんとかね」と頷いた。

僕は幼心に森川さんの名前を出してはいけないことに気付いていたから、なるべくそつちに話が行かないように気をつけた。

お姉さんもそうしているらしく、自分の幼い頃の怖い体験を話してくれた。

しかし、

そのうち、“そういう空気”が漂い始めた。

「・・・・・・」

「・・・・・・」

会話も少なくなり、僕が息苦しさを感じ始めたとき、

「屋上、行こうか？」と、お姉さんが言ったのだった。

六話 屋上にて

夏の日差しが僕を照らした。

お姉さんに連れられて、僕は屋上に來ていた。

考えれば、夏休みに入った瞬間に怪我をして入院してしまった僕は、それ以来外には出ていなかった。

だから、陽の暖かさが心地良い。

「こつち、来てみなよ」

と、お姉さんが言った。

僕は言われたとおりに、お姉さんの声の方へと向かった。

「ここ持って」と、手を掴まれて手すりに手を持っていかれる。手すりにつかまりながら、僕は屋上の隅に居るのだと理解した。お姉さんは何でこんなところに僕を連れてきたのだろう。ただ、外に連れ出してくれただけだろうか。

そんな事を考えていると、ふと、お姉さんが小さな声で言った。

「許せないよね」

と。

「え？」と、僕は聞き返した。

「私を一人にするなんて、酷いよね」と、お姉さんは言った。

それは、呟くような声だった。

「何を言っているの？」と聞き返しながら、

僕には少し理解できていた。

たぶん、森川さんの事を言っているのだろう。と。

自分を一人残して死んでいった森川さんの事を、言っているのだろう。

「.....」

僕は上手い言葉が思いつかずにそのまま手すりにつかまったまま立

ちずくんでした。

お姉さんも何も言わない。

僕の体が夏の外気に暑さを感じ始めたとき、

ドンッ

と、僕の体をお姉さんが押した。

「え？」

と、僕は手すりに強くしがみついた。

が、体の半分が向こう、つまり下に向かって出てしまっている。

「わ、わあああああッ！」

僕は声を張り上げた。

「お姉ちゃん！お姉ちゃん！」

しかし、お姉さんは助けしてくれない。それどころか、僕のそばに居るのかも解らない。

「高野君！」

後ろの方で声がした。

同時に、こっちに向かって走ってくるような足音。

その音が僕の真後ろに近づいてきたと同時に、僕の体は屋上の地面に引っ張られていた。

「何をしてるの！？」

その声は看護婦さんの声だった。どうやら助けられたいらしい。

どうやら、お姉さんは居ない。

僕は泣きそうな恐怖に襲われながら、思った。

お姉さんが僕を、殺そうとした・・・？

「――」

看護婦さんが僕に何かを言っているが耳に入らない。

何故だろうか。

何故、お姉さんは僕を殺そうとしたのだろうか。

「許せない」と、お姉さんは言った。

「私を一人にするなんて」と。

だからといって、何で僕を・・・と、そこまで考えて、

「看護婦さん！」

僕は叫んでいた。

「下見て！」と。

下を。地面を。手すりの向こう側を。

お姉さんは、僕を殺して自分も死ぬつもりだったのかもしれない。
そう思ったから。

「何・・・？」

と、少し怯えたような声で、看護婦さんは多分下を見てくれた。
そして、

「別になにもないわよ？」と言った。

違った。

僕の予想は外れていた。

「ほら、もう部屋に戻りましょう?」

看護婦さんが僕の手を掴んで、部屋へと歩を進めた。そして思い出したように、

「お客さんが来てるのよ」と言った。

誰?と力なく看護婦さんに問うと、信じられない答えが返ってきた。

看護婦さんは言ったのだ。

「森川 修一」と。

最終話 退院にて

退院の日。

「それじゃあ、高野君、包帯を取るよ?」
と、お医者さんが言った。

僕は緊張しながらも頷いた。

包帯が、くるくると僕の目から外されていくのが解る。

そして包帯の感触が目から離れたとき、

「目を開けて」

僕はゆっくりと目を開けた。

眩しい・・・。

僕は目を細めた。

一瞬目の前が真っ白になり驚いたが、時間が経つにつれて光に眼が慣れ始めた。

真っ白の部屋。

ここにずっと居たんだ。と、改めて部屋を認識する。

そして、白衣を纏いメガネをかけた初老のおじさんが目に入った。
お医者さんだ。

そしてその隣に、看護婦さんが立っている。その隣には母が笑顔で立っていた。

そして、

その隣。

見た事のない男性が立っていた。

僕は言った。

「森川さん・・・?」

男性は黙って頷いた。

荷物をまとめた後、僕は母に先に車に行ってもらっていた。
夏休み中過ごした病室のベッドに座って、その男性を見る。

森川 修一さん。

島野 明美お姉さんの大切な人。

森川さんには、ちゃんと足があった。

「退院おめでとう」と、森川さんは言った。

ありがとうございます。と、僕はちょっと前まで幽霊だと思っていた男性に頭を下げた。

そういう事だった。

森川さんは幽霊じゃなかった。

あの日。

お姉さんに屋上から突き落とされそうになったあの日、森川さんは僕の病室を訪ねてくれた。

そして、全てを話してくれた。

森川さんは重病にかかり、ずっとこの病院で治療をしていたらしい。しかし容態が悪化し、医師すらも手の施しようの無い状態になってしまった。

それを悲しんだのが明美お姉さんだった。恋人である森川さんの病を治すために、お姉さんはお百度参りをしていたそうだ。

毎日毎日、ずっと神社の神様にお参りをしていた。

すると、奇跡的に森川さんの容態は良くなっていったのだ。

しかし、ここで問題が起きた。

森川さんの無事を祈り続けてきた明美お姉さんが、森川さんと入れ

替わるかのように病に倒れた。

これが、僕が入院する一日前のことだ。そう。

つまり、僕がこの病院に入院しに気た時には既に、お姉さんはこの病院で生死の境をさまよっていたのだ。

そう。幽霊は森川さんではなく、お姉さんの方だった。

ここからは僕の推論でしかないが、あの日、僕が始めてこの部屋で“何か”の気配を感じた次の日、お姉さんは僕の部屋にお見舞いに来た。

あの時点でお姉さんは、幽体となって僕の前に現れたのではないかと思う。

そしてその日の夜、金縛りのあの夜に、お姉さんは息を引き取った。後から聞いた話だが、お姉さんの病室は僕の病室の隣の隣だったらしい。あの夜お医者さんの声や看護婦さんの声が騒がしかったのは、お姉さんの処置をしていたからだった。

そしてお姉さんは幽霊となって僕の前に現れて、僕を屋上へ連れて行った。

「彼女は、君を弟のように思っていたらしい・・・」

森川さんが悲しげな顔で言った。

「だから、君を連れて行きたかったのかもね・・・」と。

そうですか。と、僕は言った。

森川さんが僕の部屋に来て以来、お姉さんは現れなくなった。

「彼女の最後に会ったのが僕じゃなくて君だと言うのがね・・・」
複雑だよ。と森川さんは笑った。

僕はベッドから腰を上げると、荷物を抱えてドアに向かった。

「お世話になりました」

それだけを言って、部屋を出る。

背後から、森川さんの嗚咽が聞こえてきたが、振り返らずに僕は病

院を去った。

森川さんが自殺をした、と聞いたのは、それから三日後の事だった。

僕は小学生の時に視力を一時失った。

夏の暑い日の事であった。

最終話 退院にて（後書き）

最終回です。

怖いですかね？

怖がって頂ければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8382b/>

病室にて

2010年10月9日03時40分発行